

お盆に実家へ帰るのは、二年ぶりだった。帰りたくなかったわけではない。父にも母にも会いたかったし、懐かしい町を歩きたい気持ちもあった。ただ、この町には大飛がいる。幼馴染だったあいつに会えば、捨てたつもりでいた想いが、まだ胸の中に残っていると認めることになる。

「それにしても久しぶりね。そういや、ちゃんと大飛くんには帰ってくるって言ったの？」

「……いや、後で言おうかと」

「後でって。大飛くん、ずっとあんたのこと気にしてたんだからね」

「……うん、後で連絡する」

曖昧に答えたものの、連絡する気にはなれなかった。何も言わずに都会へ出て、盆も正月もろくに帰らなかった俺が、今さらどんな顔で会えばいいのかわからない。けれど、その悩みは夕方には意味を失った。

「陸真、帰ってるんだって？」

聞き慣れた声に振り向くと、大飛が玄関先に立っていた。最初に目を奪われたのは、無造作に伸びた髪だった。昔は短く切っていた黒髪が、今は襟足に触れるほど長い。日に当たるとわずかに茶色く透け、涼しげな目元へ柔らかな影を落としている。

薄手のシャツに包まれた体も、逞しいというより細身でしなやかだった。俺の知らない二年がそこにあった。それでも、目が合った途端に口元を少しだけ緩める癖は変わっていない。

その笑い方を見ただけで、胸の奥に押し込めていたものが疼いた。

「……久しぶり」

「うん」

それきり、言葉が続かない。昔なら勝手に家へ上がり込み、俺の部屋までついてきたはずなのに、今の大飛は玄関の敷居を越えようとしなかった。

「あら、大飛くん。いらっしゃい」

奥から出てきた母は、玄関に立つ大飛を見ても少しも驚かなかった。

「お久しぶりです」

「久しぶりって、この前も畑のトマトを持ってきてくれたじゃない。あれ、お父さんが喜んでたわよ」

「また採れたら持ってきます」

「いつも悪いわねえ。それより、陸真が帰ってくるって知ってたの？」

「……さっき、商店街で聞きました」

「やっぱり、この子ったら大飛くんにも連絡してなかったのね」

「母さん、余計なこと言わなくていいから」

「何が余計なの。大飛くん、盆も正月も『陸真は帰ってこないんですか』って聞いてたじゃない」

「それは……言わなくていいです」

大飛が珍しく困ったように母から目を逸らす。そ

の横顔を見て、胸の奥が落ち着かなくなった。俺がいない間も、大飛は何度もこの家を訪れていたらしい。両親に俺のことを尋ねていたことも、俺だけが知らなかった。

「大飛くん、ちょうどよかった。今日、泊まって行く？」

母の声に、俺はぎょっとして振り返った。

「え、でも……」

「昔はしょっちゅう泊まってたじゃない。久しぶりに陸真も帰ってきたんだし、ゆっくりしていけばいいわよ」

「俺は別に、一人でも平気だから」

「あんたのためだけじゃないの。大飛くんだって、ずっと会いたがってたんだから」

「母さん」

「ね、大飛くん？」

母に念を押され、大飛は答えに詰まった。断ってほしいような、頷いてほしいような、どちらともつかない気持ちでその顔を見つめる。

「……陸真が、嫌じゃなければ」

大飛の視線が、まっすぐ俺へ向けられた。そんなふうに決定を委ねられると、嫌だとは言えない。そもそも、本当に嫌なら、玄関に大飛が立っていた時点で追い返している。

「好きにすれば」

わざと素っ気なく返すと、大飛の口元がほんの少し緩んだ。

「お父さんと私は、これから空港近くのホテルへ行くの。明日の早朝便で二泊三日の旅行だから。久しぶりなんだし、昔みたいに二人でゆっくりすればいいじゃない」